

# 飼育動物における人畜共通感染症起因菌等保有状況調査結果

## (ペットショップ、一般家庭)

### 1 調査の概要

は虫類及びウサギ、ハムスター等の小動物は動物取扱業（ペットショップ等）及び一般家庭で数多く飼育されるようになったが、クラミジアをはじめとする人畜共通感染症起因菌の保有状況については未知の部分が多かった。そのため、東京都では、平成7年度から9年度にかけて、犬、猫を含め、飼育動物における人畜共通感染症の原因となる病原体の保有状況調査を行った。

### 2 調査結果（別表参照）

平成7年度から平成9年度の3年間に計404検体（ペットショップ288検体、一般家庭116検体）について調査を行った。

クラミジアは、げっ歯類や虫類など広汎な種類の動物から計25検体（ペットショップ19検体、一般家庭6検体）が陽性となった。

サルモネラは、主に、虫類から計10検体（ペットショップ8検体、一般家庭2検体）が陽性となった。

さらに散発的に、リステリアやエルシニア、食中毒起因菌である黄色ブドウ球菌なども検出された。

### 3 危害防止対策

動物取扱業者で飼育されている動物から、一部ではあるが病原体が検出された。

動物取扱業者と動物の購入者・飼育者は、以下の例示のような配慮をして動物を飼育する必要がある。

#### **動物取扱業者**

- ・飼育している動物が外見上健康であっても、病原体を保有していることがあり、餌や水、ケージ、ふん便などを適正に管理する。
- ・具合の悪い動物については、隔離して管理し、他の動物への感染の防止を図る。

#### **購入者**

- ・愛玩動物は、人畜共通感染症の原因となる病原体を保有している場合があることを十分理解する。
- ・ケージなどを十分に清掃し、口移しで餌を与えるなどの濃厚な接触を避け、動物に触ったら手を洗うなどの衛生的な取扱いをする。
- ・ハイリスクグループ（乳幼児、高齢者など）の人が動物を取扱う場合は、特に注意を要する。

飼育動物における人畜共通感染症起因菌等保有状況調査結果  
(対象: ペットショップ、一般家庭)[平成7年度～平成9年度]

目名	種類	検体総数		各検査項目における陽性検体数											
				クラミジア		リステリア		エルシニア・エンテロコリチカ		エルシニア・シュードツベルクローシス		サルモネラ		黄色ブドウ球菌	
		ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭
ウサギ目	ウサギ	33	9	1											1
げっ歯目	チンチラ	6													
	ネズミ	2	4		1										
	ハムスター	35	40	1	1										1
	プレーリードッグ	15		1				1							
	マーモット	1		1											
	モモンガ	5	1												
	モルモット	13	1	1								1			
	ヤマネ	1													
	リス	17	5			1							1		
は虫類	イグアナ	8	1									1	1		
	カメ	18	2	1								2			
	カメレオン	4										2			
	トカゲ	4													
	ヘビ	2		2											
	ヤモリ	3													
	ワニ		1												
食虫目	ハリネズミ	3													1
食肉目	アライグマ	1													
	イタチ	1		1											
	イヌ	43	25	5	1						1				2
	キツネ	1													
	ネコ	34	26	2	2								1		
	ハクビシン	1													
	フェレット	23	1	2	1										
	ミーアキャット	2		1											
有袋目	オポッサム	1													
	ワラビー	3													
	フクロギツネ	1										1			
翼手目	コウモリ	2													
霊長目	サル	5													
総計		288	116	19	6	1		1			1	8	2	4	1

注1) 平成7年度から9年度で単年度のみ実施した動物の調査結果を含む。

注2) 検体を採取した動物は、約100種類。種類は、一般的に知られている名称に再分類した。

注3) 上記陽性検体に記載している検査病原体は、以下のとおり。

クラミジア(*Chlamydia* spp.)、リステリア(*Listeria monocytogenes*)、エルシニア・エンテロコリチカ(*Yersinia enterocolit*)、エルシニア・シュードツベルクローシス(*Yersinia pseudotuberculosis*)、サルモネラ(*Salmonella* spp.)、黄色ブドウ球菌(*Staphylococcus aureus*)

黄色ブドウ球菌は人畜共通感染症起因菌ではないが、食中毒細菌として重要であり、調査を実施した。

(参考) 鳥類におけるクラミジアの保有状況調査  
(対象: ペットショップ、一般家庭) [平成5年度～平成7年度]

	検体総数		陽性検体数	
	ペットショップ	一般家庭	ペットショップ	一般家庭
鳥類	113	76	7	0

## 検査項目の概略

### **クラミジア** *Chlamydia* spp.

クラミジアに属する微生物から感染する疾病にはオウム病やトラコーマがある。オウム病は鳥類などから罹患する呼吸器感染症であり、感染した鳥の排泄物、羽毛、塵埃などを吸入して感染する。

#### **オウム病**

##### **[人の症状]**

潜伏期は1～2週間で、高熱と呼吸器症状を呈して重篤な肺炎に発展する。高齢者では死亡率が著しく高い。

##### **[動物の症状]**

感染動物（主に鳥類）は長期間にわたって唾液やふん便にクラミジアを排出する。雛鳥が罹りやすく、また成鳥では軽症のまま長く保菌するものもある。

##### **[その他]**

血清診断法ではクラミジア属の共通抗原性によりトラコーマとの鑑別が難しく、検出感度は低い。

### **リステリア** *Listeria monocytogenes*

リステリアは多くの哺乳動物、鳥類をはじめ食肉、乳および乳製品、飼料さらに水、土壌などの各種環境に広く分布している。健康な人や動物とも低率ながら保菌し、環境への汚染源となっている。リステリア症は、人や動物の双方に髄膜炎や敗血症あるいは流産などを起こし、致死率が高い。近年、特に食品媒介性の感染症として注目されている。

#### **リステリア症**

##### **[人の症状]**

新生児、乳幼児で多発する。髄膜炎や敗血症が見られる。妊婦では死流産を起こす。

##### **[動物の症状]**

反芻動物では主として脳炎、まれに流産がある。単胃動物では脳炎、敗血症が見られる。予後不良で致命率が高い。

### **エルシニア**

#### **エルシニア症（病原体: *Yersinia enterocolitica*）**

非病原菌は各種動物、植物、水、土壌などから分離されるが、病原菌は分布が限られる。幼若豚の保菌率は高く、また外見上健康な犬、猫、ネズミの保菌率も高い。外国では豚のほか、チンチラ、サルなどでの発生例が知られているが、動物の自然界における顕性感染は多くないと考えられている。

人への感染では1～2歳児に感染発生のピークがある。日本では大規模な集団感染が発生しており、食品が原因と考えられている。感染様式は不明な点も少なくなく、多くは保菌動物から飲食物を介する感染と考えられている。

##### **[人の症状]**

多彩な臨床症状を示す。乳幼児、小児の場合は腹痛、下痢・腸炎が主体であるが、虫垂炎や腸間膜リンパ節炎も起こす。

### [ 動物の症状 ]

多くの場合不顕性感染である。サル、犬、猫、豚ではまれに下痢、サルの肝臓に結節を起こす。

### [ その他 ]

臨床症状のみから本病を診断することは不可能である。ふん便や病理組織からの菌検出あるいは血中抗体価の測定を行う。

**仮性結核** (病原体: *Yersinia pseudotuberculosis*)

温帯や亜寒帯地方で多く発生する。主な感染経路は *Y. enterocolitica* と同じである。

### [ 人の症状 ]

エルシニア症の場合と類似しているが、本症の方が重症である。高熱としょう紅熱様あるいは風疹様発疹を特徴とする場合もある。

### [ 動物の症状 ]

豚、猫、犬などのほ乳類、鳥類の腸管に本菌は分布している。多くは不顕性感染であるが、ときどき、サル、チンチラ、野ウサギ、野ネズミなどのげっ歯類、七面鳥などの鳥類などに発生が見られる。しばしば激しい下痢を起こすが、敗血症や結核様病変をつくり出すことがある。

## サルモネラ *Salmonella* spp.

サルモネラを保菌している動物が食品や環境を汚染し、人に対する直接、間接の感染源となる。多くの場合食品媒介の急性胃腸炎として発生し、食中毒として取り扱われている。

また、食品媒介のほかに愛玩動物との接触感染も報告されている。特に乳幼児は感受性が高く注意を要する。

### サルモネラ症

#### [ 人の症状 ]

成人は軽症が多いが、悪心、嘔吐、下痢を主徴とする胃腸炎を起こすこともある。年齢層が若くなるにつれて症状は激しくなり、乳幼児ではチフス様症状、敗血症、髄膜炎などを起こすこともある。

#### [ 動物の症状 ]

成獣では一般に不顕性感染が多いが、発熱や下痢、妊娠しているものでは流産などを起こすことがある。幼若獣では急性経過をとり、敗血症で死亡することもある。犬や猫も不顕性感染が多く、またミドリガメは全く無症状である。

## 黄色ブドウ球菌 *Staphylococcus aureus*

ブドウ球菌属のうち、黄色ブドウ球菌のみが食中毒の原因菌である。健康な人でも鼻腔や腸管内に保菌しており、食品や自然界にも常在している。

### 黄色ブドウ球菌を原因菌とした食中毒

#### [ 人の症状 ]

黄色ブドウ球菌がエンテロトキシン (腸粘膜に作用して下痢を起こす毒素) を産生し、食品と共に摂取すると、嘔吐を起こす。ただし、食品の中で十分に増殖していないと、発病の毒量には達しない。